

他者が日本語を学び使用することへの期待

ある国が経済的、あるいは軍事的に強大になれば、優越感をもち、自分たちの言語や文化をほこるようになる。1941年に出版された『日本語の世界化』をみれば、日本語は「今や世界第二の大言語になろうとしている」という認識が確認できる(いしぐろ1941:6)。その自己認識(自信)の根拠は、つぎのような状況認識である。

今日、日本語は内地、台湾、朝鮮、樺太、南洋などの総人口1億500万、それに満州国の3700万を内輪に見積もっても合計1億2・3000万、支那、その他海外に550万、その普及範囲を大きく見るならば2億に達する(同上)。

この数字は、あまりにも過大評価した数字であると推測される。

しかし、学術的にいえば、その言語の使用者を数値化することは、そもそも難題である。アンケート調査して、自己認識を問うのか。それとも、テストしてみるのか。全員にか、ランダムにか。どの程度であれば、その言語の使用者とみなせるのか。客観的な線引きはない。

拡大志向の言語教育論には、二重基準がつきまとう。「〇〇語は学習しやすい言語である」と宣伝する一方で、学習者の「未熟さ」「つたなさ」をあげつらう。話者の数を宣伝する際には、甘い基準で見積もる一方で、個々の学習者には「ネイティブのような」「完璧さ」をもとめることもある。

石黒は、『日本語の問題』に「日本語を話す勇氣」という小論をおさめている(いしぐろ1940)。それは『(ロンドン)タイムズ』が「東洋におけるイギリス語」と題する記事で「日本人は外国人に対して日本語をはなす勇氣をあまりもっていない」と評していると紹介する文章である(同上:53)。『(ロンドン)タイムズ』の記事は1937年のものだという。石黒はつぎのようにのべている。

…『タイムズ』は同じ記事の中に「日本語を誤用する外国人を許容するよりはむしろイギリス語を学ぶことを選んで近代日本人」といっているが、これはよほど善意な解釈でなければ、かなり辛辣な皮肉である。

わたしたちは外国人に対して、もっと遠慮せずに日本語をつかってよいはずだ。日本人が日本で日本語を使うのは、権利であると同時に義務でもある。

外国語を学び、これを使うことはもちろんよい。しかし日本語を学び、これを使うことはもっとよい。一体わたしたちは外国語に力を注ぎすぎて来た。もっと心を日本語にむけ、これを美しい、よい言葉にすると同時に、学びやすく、使いやすい言葉にする必要がある。

しかし、何とんでも、わたしたちに今日かけているのは日本語を話す勇氣である。これさえあれば日本語はよくされる機会も、ひろめられる時期にも、きっとめぐまれる(同上:53-54)。

うえのような、「日本人」が「外国人」と認識した相手にたいして、日本語ではなく英語で話しかけるといふ光景は、いまでも見られるものである。しかし、一方では「日本人が日本で日本語を使うのは、権利であると同時に義務」という認識にとどまらず、「外国人が日本で日本語を使うのは、当然であり義務である」といった発想も定着しているように感じられる。そのような言語態度は、どのように形成されてきたのだろうか。

日本の経済成長と「日本語の国際化」論議

「日本人」が輸出産業に成功し、「Made in Japan」をほこるようになり、以前よりも経済的に裕福になると、「日本語の国際化」がおおきく議論されるようになった。つぎのような雑誌の特集が組まれ、本が出版された。

『国文学解釈と鑑賞』50(3)、1985年「特集 日本語—国際化社会への飛翔」

『日本語論』1994年7月「特集 国際化する日本語」

『日本語学』1994年12月号「特集 日本語の国際化」
『国文学解釈と鑑賞』62(1)、1997年「特集 日本語の「国際化」とローマ字」
『国際交流』21(4)、1999年「特集 ひらかれた日本語—日本語元年からの出発」
『Fujitsu飛翔』37号、2000年「特集 国際化と日本語」
『教育と情報』510号、2000年「特集 国際化時代のことば」
『日本語の開国』2000年
『国際化時代の日本語』2000年
「国際社会に対応する日本語の在り方」文部省国語審議会2000年

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_bunka/kokugo_index/toushin/1325309.htm

『Science of humanity Bensei』33号、2001年「特集 国際社会に対応する日本語の在り方」

2000年代になり、日本国内での日本語教育について議論するなかで「生活のための日本語」「共生日本語」といったキーワードが登場する。日本の地域社会のなかで、日本語で第一言語話者と非第一言語話者が会話をしている、あるいは非第一言語話者同士が日本語で会話するという光景が当たり前の風景になっていく。「国外」をつよく意識しているうちに、国内の国際化がすすみ、共生が議論されるようになったのである。

「おぞましき日本語」という問いかけ

日本語の国際化について議論されるなかで、第一言語話者の意識を問題化する議論も登場するようになる。たとえば、梅棹忠夫(うめさお・ただお)は「おぞましい日本語」という表現をつかって、何度も問いかけていた。1989年の講演をもとにした文章では、つぎのようにのべている。

…日本語を外国人がどんどんしゃべるようになったとき、その影響が日本におよび、日本語をすこしずつかえてゆくだろうとおもいます。それをうけいれることによって、日本語の国際化がはじめてなりたつのではないのでしょうか。漢字の廃止、正書法の確立といった永年の懸案も、かえてそのようなプロセスのなかで実現されてゆくのかもしれません。つまり、将来の日本語は、ことばをえらばずにいえば、おぞましい日本語になるのでしょうか。そのおぞましさに日本人はたえなければならぬ、文化論的にいえばたいへんつらいことですが文明論的にはたえられないのです。それはイギリス人がアメリカ英語にたえ、インド英語、シンガポール英語、さらにはすさまじい日本人の英語にたえているのとおなじことだろうとおもいます。

近代文明語をかんがえるとき、その言語には母体となる文化のしっかりした枠があり、それに対して外国があるといえるでしょう。国際化はその相互作用によっておこるのであり、双方がすこしずつ接触していくことによって変貌してゆくのではないのでしょうか。これは文明史のどこをとってもいえることで、言語もその例外ではないのです(うめさお1990:17-18)。

ある意味では、他者の言語使用に対して、寛容になることを提唱しているといえる。話者が増加することによる結末を現実的に説明しているともいえる。

ことばは、変化する。変化する背景には、さまざまな社会的要素がある。他者との接触も、そのひとつである。言語接触による変化をたんに、変化として淡々ととらえるのか、あるいは、感情的になって保守的、防衛的になるのか。変化することを「おぞましい」ととらえるのであれば、言語鎖国をして「日本語の国際化」に通じる一切を中断すればよいということになる。

「おぞましい日本語」論から30年後の現在、「「おぞましい日本語」だなんて、おおげさだ」という感覚が共有されるだろうか。それとも、「外国人の日本語」を蔑視するまなざしが維持されているだろうか。あるいは強化されているだろうか。

役割語—ステレオタイプな他者表象

「misrepresentation」という英語の表現がある。誤った表象といった意味である。メディア(media)という語とあわせてウェブを検索してみると、メディアによる他者表象がいかにステレオタイプをうみだし、強化しているのかについて議論されていることがわかる。

想像上のイメージをつくりあげ、固定化し、「特徴」を誇張させて表現することが問題化されるようになった。以前は、当事者がその場にはいないとか、いても声をあげにくい、声をあげても尊重されないことがあった。しかし、現在では、ステレオタイプな描写は「まちがっている」と指摘される。以前と比較すれば、メディアをつくる現場に多様な人がいるようになった。それでも、ハリウッドの他者表象は、いまでもステレオタイプな描写をのこしている。ハリウッドでは、「日本人」は「手をあわせて、おじぎする」のである。「黒いメガネをかけ、おおきなカメラを首からさげているスーツ姿の男性」を「日本人」と描写する時代よりは「まし」になったとはいえるかもしれない。

では、日本ではどうか。金水敏（きんすい・さとし）が『ヴァーチャル日本語—役割語の謎』や『コレモ日本語アルカ? 異人のことばが生まれるとき』であきらかにしているように、日本では長い間、「中国人」の話す日本語をステレオタイプに描写してきた（きんすい2003、2014）。だれも、じっさいには、そのように話していない。けれども、マンガやテレビ、映画などに「中国人」を登場させるとき、かならず、そのように描写してきたのである。

金水は、「役割語」が「〈標準語〉の話し手＝読者の自己同一化の対象からの異化として機能し、容易に偏見と結びつけられてしまうこと」を指摘し、役割語の問題点についてつぎのように結論づけている（きんすい2003:202）。

役割語の知識は、日本で生活する日本人にとっては必須の知識であるが、役割語の知識が、本当の日本語の多様性や豊かさを覆い隠し、その可能性を貧しいものにしてしている一面、あるいは、役割語の使用の中に、偏見や差別が自然に忍び込んでくる一面に気づかなければならない。たとえば〈アルヨことば〉は、戦前の、中国の人々に対する偏見に満ちたまなざしとともに用いられていたことを知っておく必要がある。現在の漫画で用いられている例を見ると、悪意も屈託もないようには見えるが、しかしそもそも不完全な日本語＝ピジンしか話せないかのよう描写されたとき、描写された当人はどんな気持ちがするかということを考えるべきである（アメリカ映画に変になまった「ジャパングリッシュ」をしゃべる、めがねをかけた背の低い日本人が出てきたときの気持ちを思い出せばよい）（同上:203）。

役割語は、女性や老人、博士などが発することばとして、フィクションや翻訳などで使用されてきた。実態に即した表現ではなく、あくまでステレオタイプなイメージにもとづく表現なのである。ステレオタイプとは、他者を「このようである」と決めつけるものであり、期待するものである。その決めつけや期待が規範をつくっている。

カタカナ表記による異化、「カタコト」あつかい

また、非常に根づよく定着している他者表象として、「外国人」の話す日本語をカタカナで表記することがある。カタカナで表記することで、「カタコト」あつかいする場合もあれば、たんに「外国人だから」というだけの理由でカタカナ表記しているものもあるようだ。日本語の文字（墨字）では、カタカナは異化するための装置として使用されている。

「外国人」を他者とみなし、その人たちが話す日本語を異物としてあつかうということは、その人がどのような日本語を話そうとも、問答無用で、他者化するということである。そのような「血統の論理」で構成する「日本語」の世界は、レイシズム（人種主義）の世界である。「能力の論理」でネイティブ話者が絶対的な地位に位置する「日本語」の世界もまた、レイシズムの世界である。

固定的で絶対的な「われわれ」意識があり、「他者」を下位に位置づけている。あるときには「日本語が上手だ」といって笑い、あるときは「へんな日本語」といって笑うのである。そこで笑われて困惑している人の姿を見ようともしない。自分たちを評価する側に位置づけ、だれかの言語使用に評価をくださるのである。

学ぶ側の視点をもつ

第一言語ではない言語を学習することは、はてしない道をあゆむようなものである。何度も何度も、くりかえし発音を練習してみても、「ちがう」といわれることもある。身につけるべき語彙は無限にあるように感じられる。また、ニュアンスの違いが理解できない。「母語の干渉」により、文法、発音、聞きとりがうまくいかない。しんどい思いをする。しかし、それはある意味で、得がたい、そして必要な体験でもあるのではないか。そのような体験をしてこそ、他者の言語使用に対する自分のまなざしを反省的にふりかえることができるからである。

しかし、それでも、体験できないこともあるだろう。関係のありかた次第で、言語学習は気楽なものになる場合もあるし、「できて当然」というまなざしを強くむけられた状態では、言語学習は過酷なものになる。また一方で、「標準」とされるバリエーションだけを学習することにより、多様な「ネイティブ話者」の発音に優劣をつけるような態度を身につけてしまう場合さえある。

集団の論理から「わたしのことば」へ

日本の言語政策や言語論について議論をかさねてきた安田敏朗（やすだ・としあき）は「ことばはだれのものか」という問いをたて、「わたしのことば」というとらえかたが重要であると指摘している（やすだ2011）。安田は他者の日本語使用を「かれらの日本語」と表現し、かれらの日本語について「過剰な思い入れ」をして「何かを読みこむべきではなく、「かれらの日本語」は「かれらの日本語」であって、それ以上でも以下でもない、という明々白々たる事実を、きちんと見据えていく必要がある」と指摘している（同上:238）。そして、つづいてつぎのようにのべている。

多言語化がより顕著になっていくであろう今後の日本社会において、さまざまな「かれらの日本語」が発生し、耳にする機会も増えていくであろう。そうしたときに、「それ以上でも以下でもない」という観点をもたなければ、過剰な同化、あるいは排除という機制が容易にはたらいってしまふ。そしてまた、一見妥当な「多言語社会の共通語としての日本語」という主張も、この同化と排除の力学のなかでしか存在しないのである（同上）。

たとえば、「おぞましい日本語」などというとらえかたは、過剰な意味づけをしているといえる。言語であるのだから、発音が同じであったり、ちがいがあつたりするだけのことである。安田が指摘するように、ことばを「個人のもの」「わたしのもの」としてとらえるなら、「日本語」というカテゴリー化すら、過剰な意味づけであるといえる。安田は、「わたしたちの日本語」ではなく、「わたしの日本語」いや、「わたしのことば」しかそこにはない」とのべている（同上:239）。

たんに、「わたしのことば」がある。「わたしのことば」は、それまでの人生において身につけてきたものであり、これからの出会いによって、変化し変化させていくものである。ただ、それだけのことである。だれかのことばについても、「その人のことば」として、とらえるだけのことである。論理的には。倫理的な言語態度としては。

参考文献

- 石黒修（いしぐろ・よしみ） 1940 『日本語の問題』 修文館
石黒修 1941 『日本語の世界化—国語の発展と国語政策』 修文館
梅棹忠夫（うめさお・ただお） 1990 「言語と文字の比較文明学」 梅棹忠夫／小川了（おがわ・りょう）編『ことばの比較文明学』 福武書店、5-19
木村護郎クリストフ（きむら・ごろう くりすとふ）編 2016 『節英のすすめ—脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ』 萬書房
金水敏（きんすい・さとし） 2003 『ヴァーチャル日本語—役割語の謎』 岩波書店
金水敏 2014 『コレモ日本語アルカ？ 異人のことばが生まれるとき』 岩波書店
金水敏編 2007 『役割語研究の地平』 くらしお出版
金水敏編 2011 『役割語研究の展開』 くらしお出版
須田風志（すだ・かざし） 2007 「「国際化」の中の「逸脱した日本語」について」 『リテラシーズ』 3、47-61
田中翔太（たなか・しょうた） 2011 「トルコ系移民のドイツ語 „Kanak Sprach“ は誰のもの？ 言語変種の混交、そして越境」 『学習院大学ドイツ文学会研究論集』 15、31-52
田中翔太 2012 「ドイツのTVメディアにおけるトルコ系移民のドイツ語—「役割語」としての新たな研究の可能性」 『人文』 11（学習院大学）、125-142
門間貴志（もんま・たかし） 2010 「朝鮮人と中国人のステレオタイプはいかに形成されたか」 『スクリーンのなかの他者—日本映画は生きている 第4巻』 岩波書店、141-162
安田敏朗（やすだ・としあき） 2011 『かれらの日本語—台湾「残留」日本語論』 人文書院
ロバート・スタム、エラ・ショハット（早尾貴紀監訳） 2019 『支配と抵抗の映像文化—西洋中心主義と他者を考える』 法政大学出版局

学生のコメント

そもそも、何故コミュニティが私たちに対して、コードスイッチングを求めるのか、という問題について考えてみると、コミュニティそれ自体がアイデンティティを持ちたがっている、という見方ができると思う。この言い方には語弊があって、正しくは、「あるコミュニティに属する人が、そのコミュニティにアイデンティティを与えたがっている」と形容するのが正しいだろう。つまり、人々が「自分の属しているコミュニティは特別なものである」ということを示したいがために、コミュニティに属する人々にコードスイッチングを行わせるのである。この場合、コードスイッチングは集団の中での暗号、合言葉の役割を成し、人々に帰属意識に近い感情を思い起こさせるのである。

コミュニティの中の言葉と、そこを出たときの「適切な言葉」の例として黒人の話が挙がっていたが、昨日『グリーンブック』という映画を見て感じたことを思い出した。黒人の天才ピアニストがイタリア系白人のガードのもとで、当時黒人の迫害が著しかったアメリカ南部でコンサートツアーをするという内容のもので、途中滞在するホテルやレストランで差別を受けるが、高い教養と、正しい言葉（英語、ロシア語、イタリア語が堪能であった）によって、自分がどうして差別を受けなければいけないのか、というスタンスでいた。警察にも黒人が太陽が沈んでから外出するのは禁じられているなど理不尽なことを言われても、「適切な言葉」と教養を常に感じられるものであった。でも思ったのが、適切な、というのは何が基準なんだろう…白人が話すのが適切で黒人の話し方は適切ではない？

【あべのコメント：まさに、「Are You Asking Me To Talk The 'Right' Way Or The 'White' Way?」というハフポストの記事があります (https://www.huffpost.com/entry/opinion-proper-english-grammar-racism_n_5ba91ec9e4b069d5f9d549cd)。社会学や社会言語学は、この社会にどのような規範があるのかを可視化します。場合によっては、その規範をゆさぶります。そういう規範はおかしいという問題意識があるから、可視化するわけです。さらに、社会運動として、一方的な価値観にもとづく（自文化中心主義的な）規範をうちくずすようなとりくみが、これからでてくると思います。むかし、ヨーロッパではラテン語だけが「書きことばとして適切」と見なされていた時代がありました。やがて価値観の転換がおこり、自分たちの言語（俗語）で書くようになったという歴史があります。なにが「正当」「適切」とされるのかは、「たまたま、いまそのようである」というだけのことなのです。そして強固なイデオロギーによってその規範が維持されているから、それが「当然のように見える」のです。】

先日、『Green Book』という黒人と白人がテーマの映画を観ました。黒人の主人公は幼少期からピアノの演奏を通して白人文化・ことばも身につけていました。それによって、黒人専用の宿で嫌味を言われてしまいます。それでもことばや振るまいを変えない主人公の姿から、コードスイッチングをしないというアイデンティティの保たれ方も存在しているように感じました。…後略…

文通相手募集欄の話を見て、私も現在SNS上で共通の趣味を持った人とやり取りしており、特に仲よくなった人とはLINEやInstagramのアカウントを交換しているので、時代やツールは変わっても、している事はほとんど同じだと感じた。『ウェストサイドストーリー』の映画の中に出てくる「アメリカ」という曲の中では、プエルトリコ系の人たちがアメリカでの夢の暮らしについて歌います。それに対して、「まずはアクセントから直せ」などと歌い返す場面がありました。アメリカに希望を抱く歌詞とともに「If you're all white in America」などと暗い現実が歌われており、とても印象的なシーンでした。

…英語の先生から、アメリカの映画やドラマでは人種差別がないことを主張？するために、ボスや上司役に黒人を選ぶことが多いそうです。実際にはほぼありえないそうですが。

【あべのコメント：白人男性ふたりが主役の『スーツ』（弁護士のドラマ）とか、まさに典型的ですね。】

私が言語の排他性を感じたのはバイトをしていた時です。敬語を使用しているのはもちろんなのですが、イントネーションに方言が出ていたそうで、店長から「少し威圧的に聞こえるかもしれないから標準語っぽく直してね。」と言われました。仕事の場で方言はやはり出さないほうがいいのでしょうか？

【あべのコメント：仕事によるでしょうね。】

海外に住んでいた時、小学校で英語が流ちょうな友だちに「あなたはRの発音が正しくない！」と、ひたすらRの発音がある単語を言わされたことがあります。例えば、日本人名の「りかこ」も私が発音すると「RIKAKO」ではなく

「LIKAKO」ときこえるそうです。名前に関しては私が合ってるんだけどなあ…と思ったのですが、幼いとこのようなささいなことでもイジメにつながる可能性も考えられる気がします。…後略…

アフリカ系英語は she doesn't → she don't に変わるとかいてあった。筆者はアフリカ系英語が劣っていないとかいていたが、もともとの英語を基準とすればまちがった英語であるわけで、私たちが英語を勉強してテストで She don't とかいたら×となるのと同じように、下に見られるのにも無理はないと思ってしまう。日本語でも、神奈川で生まれ育った友達が私の岐阜弁をきいてよくバカにしてくるが、認めたくはないがわからんでもないと思う自分がある。正しい、間違いとか、優れている劣っているではなく、個性や特徴としてとらえればもっと平和なのにと思う。

【あべのコメント：言語学的には、言語使用を観察して見いだせる法則、ありかたがその言語（その変種＝バリエーション）の姿です。マルとかバツ、優劣というものはありません。書きことばの基準（規範）で話しことばを判断するか、ひとつの言語を見るのに別の変種の基準で価値判断すること自体がナンセンスなんです。言語学の基本です。／とはいえ、標準英語というものが強固なものとしてあって、それとの対比にさらされる状態にあるからこそ、そして、そんなに「ちがいが」がないからこそ、言語としての地位・評価が安定しないのですよね。カントン語と北京官話ほどのちがいがあれば、「カントン語はまちがってる」とか差別されない。カントン語には香港という「領域」があるし。

「A Language is a Dialect with an Army and Navy」というマックス・ワインライヒのことばどおりの現実がある。】

カナダに留学していた際に、ネイティブの人の多くが共通して知っている、ある黒人英語の動画の話をする事があった。カナディアンネイティブの友人はジョークとして話していて、その場にはアフリカ系の移民の友人も居て同様に笑っていたが、今日の授業の黒人女性の主張のように、racismという捉え方もあるという事を改めて実感し、人種差別が無くなりつつある様に見える現代でも、言語により優劣を付けるような事が潜在していると気づきました。やはりそれは、言語がアイデンティティとの結び付きが強い為だと思う。ただアイデンティティであるが故に、自分の社会地位の確立の為に自分の言語が優れていて、他が劣っているというような考え方が生まれてしまう。現状のままでは、グローバル化に逆行していると思う。

英語の先生方が私たちに分かるよう英語を話すのもコードスイッチングといえるのでしょうか。また、いわゆる敬語で話すのもコードスイッチングというのでしょうか。…後略…

【あべのコメント：わかりやすいのは、「コードスイッチング」で論文を検索して見ることです。どんな言語現象がコードスイッチングという用語で論じられているかを確認することで、その用語の射程がわかります。英語の教員が分かりやすく話すのは「ティーチャートーク」「フォリナートーク」といいます。教室では「ティーチャートーク」にコードスイッチしていると、言えなくもないです。敬語への切りかえなどは「スタイルシフト」「スピーチレベルシフト」という用語で論じられています。いろんな用語が混在しています。専門用語の意味や範囲も、観察して見いだすことが大事。】

…私の家族は4人中2人看護師で、よく看護用語（医療用語）を使って会話してます。食卓でもそうやって話すので、会話に参加できないことも多々あります。日本人の私たちですらそうなので、異言語話者だと尚更だと思います。…後略…

専門用語の話について。小池さんの話す言葉でカタカナ言葉が多いということが話題になったことを思い出した。国民に向けて話しているのに国民に伝わってなくてそのまますすんでいく様子は排他的に感じた。…後略…

【あべのコメント：政治家のことばについては、イアン・アーシーさんの『政・官・財（おえらがた）の日本語塾』という本がすごくおもしろいです。】

以前、アメリカに移住（夫の仕事の都合による）した日本人女性が、子どもの保育園にいる来米歴の長い日本人女性（ママ友）についてブログで言っていたことを思い出しました。そのママ友は、日本語だとおとなしく礼儀正しいお母さん、というかんじだけど、英語になるとハキハキとして性格が違うそうです。これもコードの切り換えによるものなのかなと思いました。

【あべのコメント：環境／関係性のなかで、ことばは育まれていくものであり、その過程で性格も形成されていくので、言語によって性格が変化するのはありえることです。】

コードスイッチングはカスティーリャ語とカタルーニャ語のバイリンガル話者同士の会話にもしばしば見られるが、彼らは無意識に切り替えを行っており、後からカスティーリャ語からカタルーニャ語へスイッチしたタイミングを指摘しても「そうだったのだろうか?」といった反応をする。そのため、適切なタイミングで意識的な切り替えのできる黒人英語はすごいと思った。

バイト先の後輩男子の一人称は「ぼく」です。話をしていると「おれ」と言いかけた。普段の一人称は「おれ」だそうです。目上の人と話す時には「ぼく」にしているようで、普段で「ぼく」って言うて人いなくないですか?と笑っていていた。普段「ぼく」と言っている人をバカにしているようにも聞こえたが、彼の周りにはそういう人がいないのだと思った。

【あべのコメント：男だけの集まりで「ぼく」をえらぶことに忌避感がある男性は多いと思います。「男らしさ」の規範が根底にある。「おれたち」のホモソーシャル（ホモソーシャルとは、「男のきずな／連帯」などの意味）。】

…一人称の選択については自身も行っている（無意識に）。私は小さいころから一人称が自分の下の名前だったのだが、中学生ぐらいのころから恥ずかしいと思い始め、「私」に変えた。それからは家の外では「私」と呼ぶが家の中まではなぜか変えられず、いまだに自分の下の名前で呼んでいる。そしてたまにアットホームな雰囲気を感じるとき（仲の良い友達と話しているときなど）自分の下の名前で自分を呼んでしまい、焦る。…後略…

…小学生の時、一人称を名前の最初の2文字+ちゃんにしてたら、他の男子に変だと言われた経験を思い出しました。最近だと、ずっと“うち”を使用していたけれど高校3年生あたりから“わたし”を多く使うようになったと実感しています。年齢によって一人称が自然に変化している（させてる?）のはおもしろいなと思いました。日本語が他の言語よりも一人称が色々あるのはなぜなのでしょう。／外国人の多い保見団地は近年日本人住民がへってきていると耳にしました。平成28年の県の世論調査も外国人が多いのは望ましくないと答えた人が30.9%もいるそうです。日本人とちがうから、とかいう理由で、さげようとする人々が多いことがすごく残念です。…後略…

【あべのコメント：ベトナム語の一人称もいろいろあるようです（相手との関係によって変化させる）。／団地というのは、そもそも住民がへってきているんですね。空室がふえて、衰退してきている。『みなさん、さようなら』という映画が印象的です。『団地』『海よりもまだ深く』なども。】

ネットで不動産屋さんについて調べると、外国人向けの賃貸サイトが見つかった。日本の不動産賃貸についてまとめられたページもあり、言語表記も7つあったが、その中に「やさしい日本語」がないことが気になった。

【あべのコメント：自動翻訳なのではと思いますが、ちがうようです。民間企業にはあまり「やさしい日本語」というのは普及していません。ドコモのような公共性の高い、情報インフラをあつかう企業は別として。】

…以前読んだ文献で、外国人入店拒否という貼り紙を日本語で書かずに、英語やその他外国語のみで表しているところがあると見た。また他のところでは中国人、韓国人のように人種を特定させて、入店拒否等を行なっているところがあるようだ。しかも、その特定の人種の言語でしか表記されていないということだった。…後略…

【あべのコメント：「An Japanese Only」と書いている店を見たことがあります。そんなふうに必要な訳を掲示していることもあります。英語などだけを表示しているので「訳」とはいえないですが。むかしは「琉球人お断り」と掲示している店があったそうです。根深い問題です。ほかの学生が部落差別についてコメントしていましたが、就職、不動産、結婚などでの差別の歴史があり、飲食店などでもそういった差別があります。】

オプタコンは、文字を覚える前に目が見えなくなった人にはなおさら負担が大きいなと思った。／…中略…テレビ番組の街頭インタビューで「沖縄では、一人称が自分の名前の方がふつうで“私”だとぶりっ子だと思われる」と女の子が話していました。一人称のイメージも地域によってちがいで、そのイメージはあくまで「イメージを共有してる共同体」の中でしか通用しないのだなと思いました。

【あべのコメント：沖縄だと一人称だけでなく、相手のことも名字ではなく下の名前で呼びますね。】

私は同学年の人を男子なら「名字+くん」女子なら「名前+ちゃん」と呼んでいる。ものすごく浸透しているあだ名を相手が持っていれば、それで呼ぶが基本は統一している。『ドラえもん』に出てくるしずかちゃんは、人の呼び方を徹底していると思う。みんなが「ジャイアン」と呼んでいるけれど彼女はかたくなに「たけしさん」と呼ぶ。しずかちゃんはそういうキャラで生きている。私は、他の人から見ると誰かを呼びすてで呼ぶような性格に見えないだろうと自分で自分のことを認識している。

アメリカの黒人英語がかつて劣ったスラングとして捉えられてきたが、それはやはり、人種差別が続いた長い歴史があったからであることが分かる。一方で、英語と日本語を比べたとき、例えば、英語圏の国へ行った日本人は、英語を使って人とのやり取りを行うが、それどころか、日本人側が外国語で対応しているときをよく見かける。これは一体、どういうことだろうと思った。
